

COOP-JOSO News Letter 【東日本大震災 緊急速報】

組合員のみなさまへ

常総生協・震災対策本部

「震災」についての状況のお知らせ (3/14 第一報)

3月11日の「東日本大震災」発生をうけて同日、対策本部(本部長:専務理事 丸山)を設置しました。東北地方はたいへんな被害で、まだたくさんの行方不明者がいて心痛むばかりです。また、まだ余震が続いていますので、組合員のみなさん十分に注意して下さい。生協においては組合員・地域の状況ならびに関係する産地・生産者の状況把握に努めています。第一報として、現在把握出来ている状況をお知らせします。

項目	状況
組合員・地域の状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 現在のところ、組合員家族の怪我などの被害の情報は届いていません。 ● 守谷市の一部、石岡市の大部分、常総市、坂東市で停電。土浦市、つくば市、つくばみらい市、牛久市、龍ヶ崎市、取手市で断水。千葉県は一部地域を除いてはライフラインに影響なし。
産地・生産者の被害状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 被害の大きい東北地方、また茨城県内でも、まだ連絡の取れない生産者がいる状態。現在把握出来ている状況は別紙にて詳細報告。
生協の状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 人的な被害なし。3/11の供給は全軒無事配達完了。守谷本部は幸い停電・断水なし。 ● 本部建物で天井内壁の破損落下。室内の片付け含め、当日中には本部業務機能を復旧。 ● 配送センター(商品仕分センター)にも被害はなく、本震後まもなく翌週の商品セット業務再開。 ● 戸頭店は、停電に見舞われたものの営業を継続。定休日の日曜日も開店して引き続き、地域の皆さんに商品供給。
商品供給について	<ul style="list-style-type: none"> ● 3月3回供給は通常通り配送いたします。 ● ただし、被災した産地も多数にのぼり、また物流機能の麻痺(ヤマト運輸、佐川急便は茨城宛の集荷を中止)があり、欠品が多数発生しています。 ● 産地からの納品を待っての供給スタートとなり、配達時間の遅れが予想されます。 ● 14日から実施される「計画停電」への業務対応(冷蔵・冷凍品管理のための冷凍車リース、ディーゼル発電機手配等)をすすめています。 ● 品温管理上のドライアイス(千葉県市原市の火災炎上しているコスモ石油精製基地に併設されている炭酸ガスプラントで製造されていることから、関西プラントからの調達を手配。被災地の遺体用に移送されていることから、逼迫も予想される。
原発事故への対応	<ul style="list-style-type: none"> ● 震災による福島原発については、「炉心溶融」が発生したことから、最悪の事態も想定されます。予断をゆるさず、正しい情報提供とともに、状況判断をしてまいります。
被災地支援活動について	<ul style="list-style-type: none"> ● 日赤茨城県支部から被災者への物資の供給に必要な車両出動の支援要請があり、災害時緊急車両登録の配送トラック1台が出動予定。 ● 産地・生産者の状況が判明次第、必要な救援・支援・復興・募金等を生協、生協業者会で協力してすすめる予定です。 ● 生協ネットワーク21の仲間の生協「あいコープみやぎ」にはまったく連絡がとれず、今後の支援について検討中。

福島第1原発 1号機の水素爆発



■この爆発後の政府の記者会見は「15時29分放射線量は敷地境界で1,015μシーベルト/時を記録したが、15時36分の爆発をはさんで15時36分には860μシーベルトに、18時58分には70.5まで低下したので安心してもらいたい。ベントの効果があった」と。

しかし実際は1,500μシーベルトを越える放射能がまき散らされて、多くの住民が被曝していたことが後になって判明する。

■実際、12日午後福島県は東電より「放射線を計測するために設けている10のモニタリングポイントはすべてダウンしている」との報告を受けていた。

政府の発表による放射線量は定点観測ではなく、移動モニタリング車による数値であったことがのちに判明した。

●海水漬けに

圧力を減らして原子炉爆発を回避しても崩壊熱は高まるばかり。冷却水系は放棄して、最後の手段として、海水を汲み上げて原子炉に注入する「海水漬け」を行うという。

■しかし、海水注入と崩壊熱による気化との闘いとなることはまちがいない。海水の注入が上回って露出した燃料棒を水没させられるかどうかは運命を握っている。その過程では各原子炉で1号機と同様の水素爆発による放射能の放出も続くことも予想される。

早期に広範囲で避難措置を取り、本当の意味で「万全」を期し、最悪の事態にも備えた次の措置を準備することが必要と考えられる。

(2011年3月12日 文書十五)

いづれにしても、炉心の「压力容器」から外にジルコニウムとともに放射性ヨウ素やセシウム、クリプトンなどが噴出。

かくして圧力制御喪失に。「压力容器」を包むように「格納容器」があるが、それさえ圧力が高まり破裂の危険に。

■政府の発表やマスコミの解説はこうである。「格納容器の普段の圧力4気圧の倍の8気圧になっている」と。

この原子炉を設計した技術者によれば、「格納容器の普段の圧力は常圧の1気圧。4気圧というのは「設計圧力」であって、4気圧を超えれば破壊されるという意味。8気圧というのはもう異常な事態を意味している。素人や大学の学者がいい加減なことをいっている」と。

●弁を開いて放射能をまき散らしても爆発回避を決断

東電・政府は人為的に弁を開く(ベント)ことを決断。周囲の住民が広範囲に被曝するのを覚悟で。

朝5時44分、政府は半径10kmに拡大して住民に非難指示。菅首相は7時すぎにヘリコプターで福島第1原発を訪れ現地を「視察」。

9時すぎから格納容器の圧力を下げるために弁を開き放射性物質を外部に放出を実行。もうなりふりかまっていられないという非常措置である。

■政府はその危険性を認識した上で「決断」している。首相の現地入りも「視察」などではないはずだ。

ところがこの時の枝野官房長官の記者会見は何と、避難範囲を広げたのは「念のため」「住民のことを第一に考えて早め早めの対応」という発表だった。

住民が避難するまでの間には、もうすでに外部に放射能は降り注いでいて、住民は被曝していることが後から判明する。

●福島第2原発も冷却機能喪失

朝7時40分、第2原発も冷却機能を失い、東電が緊急事態を国に通報、5分後国は第2原発にも「緊急事態宣言」。

●水素爆発

第1原発1号炉の格納容器から放出されたジルコニウムは建家内部の酸素と触れて「水素爆発」を起こし、建家を吹き飛ばした。15時36分である。

【心配されていた大地震時の原子力発電所】

福島原発が「炉心溶融」

政府は原発で「何が起きているのか」を正確に正直に情報公開して、住民の安全を確保を

「東日本大震災」は、その規模をマグニチュード9.0に修正し、「世界最大規模」の地震となりました。

同時に、大震災に伴う大変な事態が進行しています。

12日、経産省原子力安全委員会は福島第1原発で「炉心溶融が発生したと見られる」と、最悪の事態を発表した。

1979年米国で起きた「スリーマイル島原発事故」のメルトダウン(大規模な炉心溶融)の手前であることを認めた。

ただでさえ自然災害の猛威の前に人命救助さえままならない事態なのに、それに追い打ちをかけるように「原子力発電」という「人為」の災害への最悪の事態に入ろうとしている。

■政府の発表(記者会見)は、国民のパニックを回避するのを優先させるあまり、断片的な情報を、「念のため」「万全を期している」「不測の事態」等の言葉で包み、正確で正直な情報を国民に伝えず、結果、周辺住民を「被曝」させる結果を生み出しています。

原発という人為災害はさらに広範囲な被災をもたらす危険性があります。

これから起こりうる事態を受け止め、冷静に対処するためにも、「今、福島の原子力発電所でいったい何が起きているのか、何が起きようとしているのか」について取り急ぎ整理して情報提供しておきたいと思いません。

●「緊急停止」させる ～「制御棒」は入った

地震発生に伴い、「制御棒」が入ったところまではよかった。これで核分裂反応を緊急停止(シャットダウン)させるところまでは対応できた。

●次は核分裂生成物の崩壊熱冷却

核分裂反応が止まっても、核分裂によって生まれていた放射性のヨードやセシウム、クリプトンなどの「核分裂生成物」は、放射線を出し「崩壊熱」を出しながら引き続き連鎖して分裂してゆく。

次の段階では、300℃に達している崩壊熱を冷ましながらか50℃位まで温度を下げていかなければならない。

すでに中の水は沸騰しており、温度を下げるためには外から水を入れて「熱除去」しなければならない。水を入れるためにはポンプを回す電源が必要となる。しかし地震で「停電」。こうした事態を想定して二重三重の「非常用電源」が用意されていたはず。

●非常用電源の起動に失敗

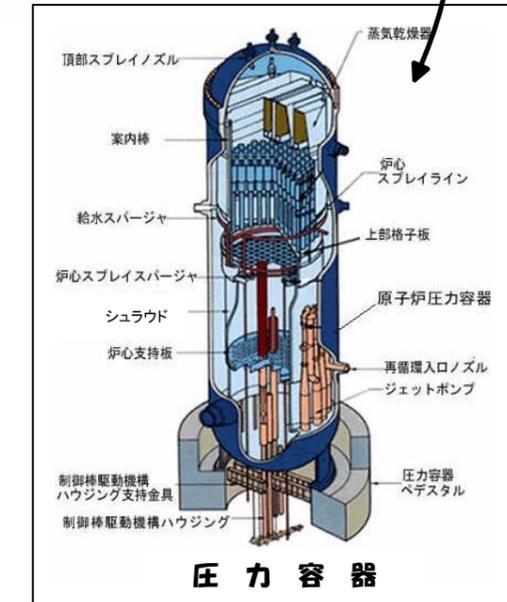
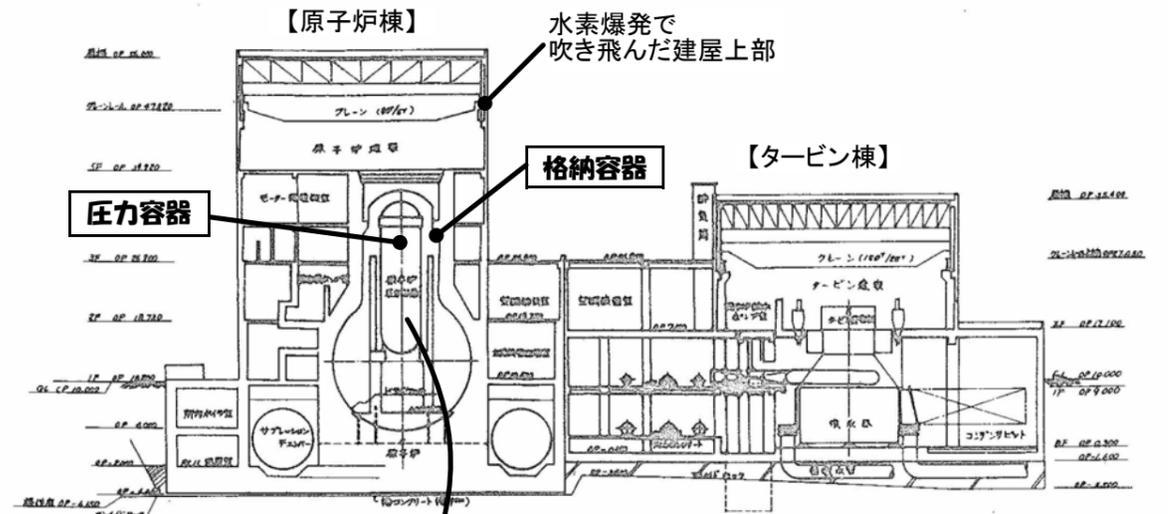
ところが、何度も訓練していたはずの二つの「非常用電源」が起動しない。

すでに津波で重油タンクは流されておりディーゼル発電機も起動しない。所内の損傷もあるのか蓄電池系も起動に失敗。

■11日17時35分には冷却剤漏えいも確認され、東電は18時30分すぎに「原子炉熱除去機能喪失」を国に通報。放射能漏れの恐れありとして菅首相名で「原子力緊急事態」を宣言。

これまで「原子炉施設に必要な電源は主発電機または275KV2母線から供給され、さらに予備電源として66KV送電線からも受電できる。これらの電源がすべて喪失しても、原子炉施設の安全確保に必要な電力は、ディーゼル発電機および所内蓄電池系から供給できるようになっている」。だから二重三重に安全であるとしてきた論拠は大震災を前にあつけなく崩れることとなった。

おそらく何度も起動を試みたであろうが、結局かなわなかったと思われる。



●圧力容器内で燃料棒露出、溶融へ

原子炉の中心には核燃料をコントロールしながら反応させる「圧力容器」がある。核燃料棒の集合体の間に中性子を吸収するカーテンがあったり、反応を制御のために上下する「制御棒」が入っていて、水で満たされている。核分裂反応の熱で水が沸騰して蒸気となり、この蒸気圧がタービンに送られて発電するのが原理。

この圧力容器内にポンプで水が送り込めなくなると、水による冷却ができず、核燃料体の温度は急上昇。水は沸騰・蒸発して水位が下がって核燃料棒が露出。最大露出70cmとか1.7mとかと説明された。

核燃料棒の表面を覆っているジルコニウムが熱で溶け出した！「溶融」が始まった。

温度があがって「圧力容器」の圧力はどんどん高まって爆発の危険性に。内部の圧力は壊れる上限の設計圧力の87.5気圧を超えようとしていた。

「圧力容器」の圧力が限界となり、①内部の圧力を抜く最後の砦「のがし安全弁」が働き、笛のついたヤカンのように、ピーという音を立てて安全弁が吹いたか、②それとも地震で圧力容器のどこかが破断していてそこから吹き出したのか。

■政府は、なぜ圧力容器の圧力が上がったのかの原因を含めて、何が起きているのか一切語らない。不明のままである。

ところが、19時46分、枝野官房長官は記者会見で「原子炉に問題なし」と発表した。

●冷却機能喪失と「避難指示」

政府は非常用電源車を東京、水戸、大宮、自衛隊から送り込み、到着して非常用電源を確保したもののそれもうまくいかなかったようだ。冷却機能の完全喪失を意味した。

かくして20時50分すぎより、県・国がたてつけに半径3km、続いて5kmの住民の「避難指示」を出す。

夜23時、建物家屋で放射線量が上昇。翌12日0時15分から1時45分の間でようやく住民は圏外に避難した。

しかし実際は次のような事態が起きていた。